

第6章 総括

第1節 鳥取県東部における平安時代中期から中世前期の土師器について

第4章で述べてきたように、下坂本清合遺跡2区の出土遺物は、一部ピット内からの出土はみられたものの、大半は自然流路内（18流路、36流路、163流路）からの出土である。

これらの遺物は自然流路内出土という性格上、ある程度様々な時期の遺物が入り混じっている可能性は避けられない。よって遺物それぞれの年代を検討するにあたっては、その地域における他遺跡出土の遺物から導き出された編年に頼らざるを得ない。

下坂本清合遺跡2区で検出した遺構の中心となる時期は平安時代中期から中世前期（おおよそ10世紀～13世紀）と考えられる。因幡における該期の土器変遷については、谷口恭子氏により鳥取市山ヶ鼻遺跡SK14出土遺物について出土層位別に6段階（I～VI期）の変遷案（谷口1996）が示されて以降、諸氏により様々な変遷案が示されている（八峰1998・2000・2004、筒井他2004、中森2012、岡田・八峰2014）。

第19表は、鳥取県東部における当該期の土師器出土遺構について、それぞれの研究者における変遷及び年代観をまとめたものである。良好な出土状態での遺物が限られるためもあるが、この表にみると、変遷案が示される毎に基準となる遺物が入れ替わり、年代観も前後している状況である。特に八峰変遷案については、数次にわたる改訂がおこなわれているが、（八峰1998・2000・2004、岡田・八峰2014）、改訂の都度それまでの変遷案との変更点及びその変更理由が明確に示されていないため、変遷案の妥当性を検証する上で課題があるといえる。また中森変遷案（中森2012）については、土師器壺・皿について器種・器形毎の変遷案が明示されているが、年代観を示すことについては慎重な姿勢であり、具体的な年代観が示されていない。鳥取県東部における当該期の土師器編年について第19表のように様々な意見がある中で、基軸となし得る具体的な年代観が提示されるに至っていない点は惜しまれる。

そこで本節では、下坂本清合遺跡2区で検出された各遺構の存続年代を明らかにするため、鳥取県

第19表 鳥取県東部における10～13世紀の土器変遷案比較

		谷口1996	八峰1998	八峰2000	筒井ほか2004	八峰2004	中森2010	中森2012	岡田2014	八峰2014	
9世紀	後葉 未葉	山ヶ鼻II SK14- I期		岩吉IVSX01			山ヶ鼻II SE01 花原窯3号窯		岩吉IV SD05 大井聖坂IV区 SK06		
	初頭 前葉										
10世紀	中葉 後葉 未葉	山ヶ鼻II SK14- II期 (一部)		山ヶ鼻II SK14- I期 山ヶ鼻II SK14- II期 山ヶ鼻II SK14- III期 山田窯12号窯 山田窯10号窯		山ヶ鼻II SK14- II期 山田窯12号窯 岩吉IV SD-X(一部) 岩吉IV SD-05	山ヶ鼻II SK14- I期 山ヶ鼻II SK14- II期 山ヶ鼻II SK14- III期 山ヶ鼻II SK14- IV期	山ヶ鼻II SK14- II期 岩吉IV SDZ 古市I C区SE03 山田窯10・12号窯	山ヶ鼻II SK14- III期 山ヶ鼻II SK14- IV期 古市II SE-B01 古市II SE-B03	山ヶ鼻II SK14- III期 山ヶ鼻II SK14- IV期 古市II SE-B01 古市II SE-B03	
	初頭 前葉										
11世紀	中葉 後葉 未葉	山ヶ鼻II SK14- III期 (一部) 岩吉IV SDX 秋里B II区遺構外		山ヶ鼻II SK14- III期 (一部) 岩吉IV SDX 秋里B II区遺構外	山ヶ鼻SD20		山ヶ鼻II SK14- III期 山ヶ鼻SD20 岩吉IV SD-X(一部)	山ヶ鼻II SK14- IV期	菖蒲B区SK01 秋里(土地区画) SRO-01	菖蒲B区SK01 秋里(土地区画) SRO-01	
	初頭 前葉										
12世紀	中葉 後葉 未葉	山ヶ鼻II SK14- IV期 秋里(マンジョン) SB01-P3 秋里(マンジョン) SK16		秋里(マンジョン) SB01 秋里(マンジョン) SK16	山ヶ鼻II SK14- V期		山ヶ鼻II SK14- 22層 山ヶ鼻II SK14- V期 秋里(マンジョン) SB-01P3 秋里(マンジョン) SK16(一部) 秋里(マンジョン) B区第5・6層 秋里D III区交差点SK02	本高円ノ前SK10 菖蒲遺跡SD03	秋里(マンジョン) SB01P3 内海中寺ノ谷SXA01	山ヶ鼻II SK14- V期 秋里(マンジョン) SK15+16 菖蒲B区SK01 卯垣ギットリSK14+15	
	初頭 前葉										
13世紀	中葉 後葉 未葉	山ヶ鼻II SK14- V期 山ヶ鼻II SK14- VI期		山ヶ鼻II SK14- IV期 菖蒲B区SK01 秋里D III区交差点SK02	山ヶ鼻II SK14- VI期		山ヶ鼻II SK14- VI期 秋里(マンジョン) SK16(一部) 菖蒲B区SK01 大井家ノ下モ遺構外	秋里(マンジョン) SK15 西大路土居SK49 山ヶ鼻II SE02	山ヶ鼻II SE02 大井家ノ下モ遺構外		
	初頭 前葉										

※編年内で前後の時期が重複するものは、前の時期を優先して示した。

東部における当該期の土師器の変遷及び年代観について整理を試み、当遺跡2区出土の遺物の年代観の明確化を図るものとする。対象地域の鳥取県東部とは現在の鳥取市以東とする^(註1)。

(1) 検討対象遺構の抽出

まず検討対象遺構の抽出を行った。抽出の基準を条件①：一括性が高いもの。条件②：複数の器種が供伴していること。条件③：貿易陶磁など時期の推定できる遺物が伴っていること、とした。ただし当該期の因幡においては良好な出土状況を示す資料が少ないとため、条件①は絶対条件としつつも、これに条件②、③のうち少なくとも一方を満たすことを条件として抽出した。そのため溝や自然流路など、複数時期に亘って機能したと考えられる遺構からの出土遺物は基本的に対象外とした。

(2) 検討方法

まず検討対象期間全般に亘って存続し、帰属時期による形態的特徴が最も発現すると考えられる壺について、同一遺構内から出土したものを検討し、各時期の法量及び形態的特徴をもとに分類案を作成した。

次に貿易陶磁器などで帰属時期の想定できる遺構を時間軸毎に並べ、壺の各分類の時間的変遷について把握するとともに、その妥当性を検証した。

最後に壺で確認した形態的変遷をもとに、共伴する皿・鍋・甕について出土遺構毎に並べ、形態的分類及び器種構成を加味した変遷を検討・把握した。次項にその結果を整理して示す。

(3) 分類

土師器の壺と皿について、形態的特徴を基に以下のように分類した。

【土師器壺】(第103図)

壺ア：底部から口縁部まで直線的、あるいはやや内湾しつつ外傾するもの。

法量に特大・大・中・小が認められる。

壺イ：体部が明瞭に内湾し、口縁部やや外傾するもの。

壺ウ：体部中位がくびれ、口縁部外反するもの。

壺エ：広い平底から直線的に外傾するもの。

高台付壺

足高高台付壺

【土師器皿】(第104図)

皿ア：体部が外湾しつつ外傾するもの。皿部の浅いものと深いものがある。

皿イ：底部が高台状に突出し、体部が内湾しつつ外傾するもの。

皿ウ：底部平底で、体部が緩く内湾しつつ外傾するもの。

皿エ：平底の底部が口径に比して広く、体部が緩く外湾しつつ外傾するもの。

高台付皿：皿部の浅いものと深いものがある。

柱状高台：壺の可能性もあるが、今回は皿に含めた。

皿ウについては、さらに細分できる可能性があるが、今回は細分までは至らなかった。また煮炊具については、今回対象となるものが少なく、分類も甕・鍋・瓦質鍋・瓦質羽釜とするに留めざるを得なかった(第105図)。

S=1/8

		环I	高台付环	特大	大	中	小	环II	环III	环IV	足高高台付环
900	I期	1 山ヶ鼻 SK14 I期-157									
		2 山ヶ鼻 SK14 I期-128									
1000	1段階	3 山ヶ鼻 SK14 I期-117		4 山ヶ鼻 SK14 II期-113	5 山ヶ鼻 SK14 II期-114	6 山ヶ鼻 SK14 II期-115	7 山ヶ鼻 SK14 II期-116				
				8 山ヶ鼻 SK14 III期-41	9 山ヶ鼻 SK14 III期-43	10 山ヶ鼻 SK14 III期-46					
1100	II期			11 山ヶ鼻 SK14 III期-37	12 山ヶ鼻 SK14 III期-38	13 山ヶ鼻 SK14 III期-49		21 山ヶ鼻 SK14 III期-50			
				14 内海中寺ノ谷 SKA01-4		15 山ヶ鼻 SK14 IV期-17		22 内海中寺ノ谷 SKA01-6			
1200	III期			16 菖蒲 B区 SK01-33	17 菖蒲 B区 SK01-41	18 菖蒲 B区 SK01-37	19 菖蒲 B区 SK01-35	20 菖蒲 B区 SK01-36	23 菖蒲 B区 SK01-39	24 菖蒲 B区 SK01-39	(参考) 供伴III
	IV期							25 秋里 (7/23) SK15-2			
								26 秋里 (7/23) SK15-5	45 秋里 (7/23) SK14-4		
								27 秋里 (7/23) SK15-7	44 秋里 (7/23) SK15-9		

※遺物下部キャラクションの内容は以下のとおり
 ○: 底部回転系切り
 □: 底部回転へラ切り
 【例】菖蒲 B区 SK01 - 77

第103図 烟取県東部における10～13世紀の土師器環の変遷

(4) 変遷

これらの土器類を、以下のⅣ期8段階の変遷で捉えることができると考える（第103～105図）。

【I期】

土師器主体となる時期で、谷口変遷案（谷口1996）で山ヶ鼻遺跡SK14Ⅱ期とされる土器群が該当する（註2）。

坏の一部には回転ヘラ切りの坏エ（2）がみられるが、土師器において回転糸切りが主体となる。大型の高台付坏（3）のほか、坏アは特大・大・中・小と法量分化が認められる。このうち特大とした4は高台付坏とほぼ同法量、同形状である。坏アの体部は直線的に立ち上がるものからやや内湾する傾向になる。

皿は皿ア、皿エ、高台付皿が認められる。皿エ（31）は前代の底部回転ヘラ切りのもの（30）から回転糸切りへと切り替わる。高台付皿及び皿アは浅いもの（32・36）と深いもの（33・37）がある。

【II期】

皿イ、皿ウが登場し、皿の器種分化が認められる時期としてII期を設定した。また主に坏の形態変化によってII期を3段階に分けた。いわゆる足高高台付坏及び柱状高台（橋本1994）の出現もこの時期であり、土師器の器種が多様化する時期であると評価できる。

（II期1・2段階）

山ヶ鼻遺跡SK14Ⅲ期とされる坏アは体部の外傾度合によってやや外傾するもの（8・9・10）と強く外傾するもの（11・12・13）が認められ、法量も前段階のI期と同じくそれぞれ大・中・小と揃っている。そのため、これらの形態差は時期差を反映したものと考え、I期坏アの形状との比較から、前者が古く後者が新しい特徴であると判断し、それぞれII期1段階、II期2段階と把握した。従って他の坏イ（21）、足高高台付坏（28・29）及び皿、甕も2時期に分けられると考えられるが、資料不足で分類に至らなかった。そのため、これらについてはII期1・2段階と一括した。前述したように、この時期に皿イ（46）、皿ウ（49・54）、足高高台付坏（28・29）が加わる。坏イとした21については、次項でII期3段階に位置づけた22のプロトタイプと捉えたが、系譜を異にする可能性もあり、更なる検討が必要と考える。

（II期3段階）

大きな傾向として、II期2段階に体部外傾度が最大となった坏アは、II期3段階になって11から14への変化のように器高を減じ始める可能性があるが、資料不足で判別は難しい。坏イ（22）はII期1・2段階の21に比して大型化しているが、法量が分化している可能性もある。そのほかこの段階の特徴としては、II期2段階に比して皿の法量が縮小し、柱状高台（61・62）が出現する点が挙げられよう。内海中寺ノ谷遺跡SXA01（財団法人鳥取市文化財団2005）出土土器及び山ヶ鼻遺跡SK14Ⅳ期とされる土器群がこの段階に相当する。

【III期】

皿が明瞭に小型化（口径8cm前後）して、いわゆる小皿となり、土師器鍋が出現する時期をIII期とした。III期は坏の形態及び瓦質鍋の有無により2段階に分けた。

（III期1段階）

坏アは前段階のII期3段階と法量、形態とも類似しており明確に分類することはできない。II期には認められなかった特大の坏アは、大型に位置づけられる17よりも底径の大きな16が認められるこ

S=1/8

		Ⅲ工	高台付Ⅲ	浅	深	ⅢⅦ	ⅢⅨ	柱状高台
900	I期	山ヶ鼻 SK14Ⅰ期-155	30					
		山ヶ鼻 SK14Ⅰ期-125	31	山ヶ鼻 SK14Ⅰ期-118	32	山ヶ鼻 SK14Ⅰ期-119	33	山ヶ鼻 SK14Ⅰ期-123
1000	II期	山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-60	34	山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-59	35	山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-53	38	山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-52
		山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-66	36	山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-64	37	山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-124	39	山ヶ鼻 SK14Ⅱ期-51
1100	III期	3段階	40	菖蒲 B 区 SK01-4	41	菖蒲 B 区 SK01-22	42	菖蒲 B 区 SK01-17
		2段階	43	山ヶ鼻 SK02-1	44	山ヶ鼻 SK02-2	45	山ヶ鼻 SK02-1
1200	IV期	1段階	46	秋里川区交差点 SK02-2	47	菖蒲 B 区 SK01-2	48	菖蒲 B 区 SK01-9
		2段階	49	秋里川区交差点 SK02-2	50	菖蒲 B 区 SK01-1	51	菖蒲 B 区 SK01-18
			52	菖蒲 B 区 SK01-17	53	菖蒲 B 区 SK01-2	54	菖蒲 B 区 SK01-9
			55	内海中寺ノ谷 SKA01-1	56	内海中寺ノ谷 SKA01-8	57	内海中寺ノ谷 SKA01-9
			58	内海中寺ノ谷 SKA01-8	59	内海中寺ノ谷 SKA01-9	60	内海中寺ノ谷 SKA01-8
			61	内海中寺ノ谷 SKA01-9	62	内海中寺ノ谷 SKA01-8	63	内海中寺ノ谷 SKA01-9

凡例
 ○: 底部回転糸切り
 □: 底部回転ヘラ切り
 【例】菖蒲 B 区 SK01 - 77

※遺物下部キャラクションの内容は以下のとおり
 (遺跡名) - (機動番号)

第104図 烟取県東部における10～13世紀の土師器Ⅲの変遷

とから、Ⅰ期以降当該期まで特大の壺アが存続していた可能性がある。Ⅲ期1段階の特徴は、皿の明瞭な小型化と土師器鍋の出現であろう。また後に壺の主たる器種となっていくと考えられる壺ウ(24)もここで出現している。壺イも前段階に比して大型の23が認められる。鳥取市菖蒲遺跡B区SK01出土土器(財団法人鳥取市教育福祉振興会1994)のほか、山ヶ鼻遺跡SK14V期とされる土器群が当該期に相当する。

(Ⅲ期2段階)

瓦質の鍋(75)及び羽釜(77)が確認できるのは当該期からである。壺アの器壁が厚くなる(19・20)ことから、Ⅲ期を2段階に分離してみた。また当段階とした皿は、厚めの底部で、口縁端部が細く尖る特徴をもつ(52・57)ことなども年代的指標としうる可能性もあるが、型式差として捉え得るかどうか現段階では判断しかねる。今後の資料の増加を待ちたい。Ⅱ期3段階に引き続き柱状高台(63・64)が認められる。秋里遺跡SK16(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)、本高円ノ前遺跡SK10(財団法人鳥取市文化財団2004)出土土器及び山ヶ鼻遺跡SK14VI期とされる土器群が当該期に相当する。

【Ⅳ期】

壺アがみられなくなり、壺ウが主流となる。皿の形態変化から2段階に分けた。

(Ⅳ期1段階)

類例が乏しいため即断できないが、鳥取県東部では、この段階に壺アに替わって壺ウが壺の主体となるものと考えられる。皿はア～ウまで認められ、法量の縮小化が頂点に達し、口径7cm前後と最も小さくなる(42・43・48・53・58)。

煮炊具については、前段階に引き続き瓦質の鍋及び羽釜が認められる(76・78・79)。

そのほか、当該期と考えられる山ヶ鼻遺跡SE02(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)の出土遺物中に、土師器甕の口縁部(72)が認められる。土師器の器種変遷における全体的な流れから、土師器甕はⅡ期に消滅し、Ⅲ期には土師器鍋に替わるものと見込まれ、72は古い時期の遺物が混入したものと解釈したいが、例外的に扱ってよいものかどうか現段階では判断しかねる。今後土師器甕の存続期間についても改めて検討する必要があるのではないだろうか。

当該期の土器群としては、山ヶ鼻遺跡SE02のほか、秋里遺跡SK15(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)及び山ヶ鼻遺跡SK14VI期とされるものが相当する。

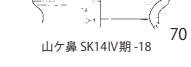
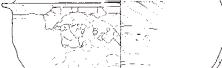
(Ⅳ期2段階)

これまで小型化の一途を辿っていた皿に、やや大型化が認められる(44・45・60)ことからVI期1段階と分離しVI期2段階とした。VI期の皿は、これまでの皿アや皿ウの系譜で捉えられるが、供伴する壺ウ(25～27)との形態的類似性が高く(第103図)、何らかの意図で壺ウをスケールダウンさせたものを作製したの可能性も考慮すべきかもしれない。

煮炊具は、土師器鍋(74)が認められる。底部まで残存していないが、丸底を指向する形態をしており、平底気味であるⅢ期1段階の73との形態差をみせる。また瓦質の鍋及び羽釜は当該期に良好な資料を見いだせないが、14世紀以降も存続していることが確認できる(加藤2007)。

秋里遺跡DⅢ区SK02(財団法人鳥取市教育福祉振興会1996)、卯垣ギットリ遺跡SK14・15(財団法人鳥取市文化財団2013)出土土器が当該期に相当する。

S=1/10

		甕	鍋	瓦質鍋	瓦質羽釜
900	I期	 67 山ヶ鼻 SK14 I期-158			
		 68 山ヶ鼻 SK14 II期-130			
1000	1段階	 69 山ヶ鼻 SK14 III期-72			
	2段階				
1100	II期	 70 山ヶ鼻 SK14 IV期-18	 71 内海中寺ノ谷 SXA01-7		
1200	1段階		 73 山ヶ鼻 SK14 V期-10		
	III期	 75 山ヶ鼻 SK14 VI期-4 ■		 77 本高円ノ前 SK10-3 ■	
	IV期	 72 山ヶ鼻 SE02-3		 76 山ヶ鼻 SE02-5 ■	 78 山ヶ鼻 SK14 VI期-8 ■
			 74 秋里 D III区交差点 SK02-3		 79 山ヶ鼻 SE02-4 ■

凡例
■: 瓦質土器

※遺物下部キャプションの内容は以下のとおり
(遺跡名) (遺構名) - (掲載番号)

【例】菖蒲 B 区 SK01 - 77

第105図 鳥取県東部における10～13世紀の甕・鍋の変遷

(5) 年代

次に、各段階の想定される実年代について述べる。

まず実年代を想定できる遺物について述べる。I期の前段階にあたる山ヶ鼻遺跡SK14 I期土器(1・30・67)を包含する層中より検出した炭化物の放射性炭素年代測定結果の歴年代交点(AD895)から山ヶ鼻遺跡SK14 I期が9世紀末を前後する時期と想定できることから、続くI期の上限は10世紀初頭と考えられる。

次に年代が想定できるのは、11世紀後半から12世紀後半に比定される白磁碗IV類(太宰府市教育委員会2000)が出土しているII期3段階とした内海中寺ノ谷遺跡SXA01と、III期1段階とした菖蒲遺跡B区SK01である。

そしてIV期1段階の山ヶ鼻遺跡SK14 VI期土器群には12世紀後半から13世紀前半に比定される東播系須恵器鉢II B2類（佐藤2013）が、同じくIV期1段階の山ヶ鼻遺跡SE02からは、13世紀前半に比定される龍泉窯系青磁碗II -b類（太宰府市教育委員会2000）が出土している。続くIV期2段階の秋里遺跡D III区SK02から13世紀中頃と考えられる三足羽釜（鳥取市教育福祉振興会1996）が出土している。

以上をまとめると、以下のようなになる（※は年代推定遺物のない段階）。

9世紀末（山ヶ鼻遺跡SK14 I期：放射性炭素年代測定）

10世紀初頭～ I期

※II期1段階

※II期2段階

11世紀後半～12世紀後半 … II期3段階（白磁碗IV類）

11世紀後半～12世紀後半 … III期1段階（白磁碗IV類）

※III期2段階

12世紀後半～13世紀前半 … IV期1段階（東播系須恵器鉢II B2類）

13世紀前半 … IV期1段階（龍泉窯系青磁碗II -b類）

13世紀中頃 … IV期2段階（三足羽釜）

以上の実年代想定資料を踏まえ、各段階の年代観を以下のように示しておく。

I期 … 10世紀前半

II期1段階 … 10世紀後半

II期2段階 … 11世紀前半

II期3段階 … 11世紀後半

III期1段階 … 12世紀前半

III期2段階 … 12世紀後半

IV期1段階 … 13世紀前半

IV期2段階 … 13世紀中頃～

I期からII期2段階は10世紀～11世紀前半を半世紀毎に按分した。併に白磁碗IV類を供伴するII期3段階とIII期1段階は、白磁碗IV類以前である12世紀後半以前の時期が想定されるIII期2段階の存在を考慮し、白磁碗IV類の基準年代である11世紀後半～12世紀前半を按分し、それぞれ11世紀後半（II期3段階）、12世紀前半（III期1段階）とし、III期2段階を12世紀後半とした。

（6）下坂本清合遺跡2区出土土師器壺・皿について

以上の検討を踏まえて、下坂本清合遺跡2区で検出された遺構内出土の土師器壺・皿の時期をみると第106図のようになる。

下坂本清合遺跡出土の土師器のひとつの特徴として、底部回転ヘラ切りによる壺・皿が一定量含まれる点がある。これについては、鳥取県内では底部回転糸切りが主体となる10～12世紀にあって回転ヘラ切りの皿が多く出土している米子市錦町第1遺跡の土器溜り出土資料（米子市教育文化事業団1996）のように、岡山県の美作地方との係わりを想定する見解（八峰1998）などがあり、当遺跡出土の底部回転ヘラ切りの土師器も、他地域との関連性のなかで捉えるべきものである可能性もあるが、今回は一先ず前記の分類案のなかで捉えることとした。

163流路はⅠ期からⅢ期までの土器が認められる。これらの出土位置をみてみると、Ⅰ期からⅡ期2段階(Po65・66・71・72)までは36流路と重複しない箇所から、Ⅱ期3段階からⅢ期にかけて(Po52～60・62～64・68・69)は36流路と重複する箇所を中心に出土していることがわかる。第1遺構面18流路、第2遺構面36流路、第3遺構面163流路の各段階の調査にあたっては、それぞれの流路の識別にかなりの難渋を伴っており、163流路出土のⅡ期3段階からⅢ期の遺物はあるいは36流路の埋土中出土遺物として分離される可能性がある。

この可能性に依拠すれば、出土土器が土師器鍋と瓦質鍋のみであった36流路の機能した年代はⅡ期3段階からⅢ期にかけての時期(11世紀後半～12世紀)である、36流路前段階の163流路の機能した段階はⅠ段階からⅡ期2段階(10世紀～11世紀前半)と整理しうる。なお、湿地状堆積となつた段階である18流路からの出土土器(Po6・7)は、36流路と重複する地点から出土したことから、これらも前段階の流路から混入した可能性があり、18流路の堆積は13世紀以降に降る可能性も考えておきたい。また178流路(第84図)の埋没最終段階に残存した流路の痕跡と考えられる135流路(第74図)から出土した土師器(Po48・49)は、Ⅱ期2段階から3段階のものが認められるため、163流路機能段階から36流路が機能し始める時期に埋没したものと判断される。

続いて、流路以外の遺構出土土師器をみてみる。133落ち込み出土の坏ア(Po44)は、内海中寺ノ谷遺跡SXA01出土の土師器坏(第103図14)に胎土及び形状が酷似することからⅠ期3段階に、皿イ(Po45)は法量から、第104図皿イのⅡ期1・2段階(46)とⅢ期1段階(47)を繋ぐⅡ期3段階に相当すると考えられ、133落ち込みの年代は、概ねⅡ期3段階(11世紀後半)に当てられよう。

掘立柱建物3を構成する140ピットからも、坏ア(Po28)と皿イ(Po27)が出土している。Po27はやや小型化しており133落ち込み出土のものより新しい様相を呈するが、Ⅱ期3段階(11世紀後半)の範疇で捉えられると考えられる。またPo28は、体部の外傾度からⅡ期3段階～Ⅲ期1段階(11世紀後半～12世紀前半)と判断されるが、Po27と共に伴することから、Ⅱ期3段階と捉えることができる。よって掘立柱建物3は11世紀後半の時期が充てられよう。掘立柱建物6を構成する146ピット出土Po38はⅡ期3段階からⅢ期1段階(11世紀後半～12世紀前半)であろう。掘立柱建物1を構成する23ピット出土の皿ウ(Po24・25)及び柵列1周辺ピット群の81ピット出土皿ア(Po29)は、その法量からⅢ期(12世紀代)と考えられる。

2耕作痕出土皿ウ(Po1)は底部のみの破片で判断は難しいが、Ⅱ期3段階からⅢ期1段階(11世紀後半～12世紀前半)、4耕作痕中出土坏ア(Po39)も体部の外傾度が最大となり、やや器高が低くなるという特徴を有することから、同時期と考えられる。同じく147土坑出土のPo46は、全体の器形がわからぬいため判断は難しいが、器壁が厚くなる特徴から、Ⅲ期2段階(12世紀後半)にあたるか。4耕作痕出土の坏ア(Po40)も同様にⅢ期2段階と捉えておく。

このようにみてくると、調査区北半部に展開する遺構群は、Ⅱ期3段階からⅢ期2段階(11世紀後半～12世紀)のものであり、36流路の機能時期と重複するといえる。

また、13世紀代(Ⅳ期)以降については、163流路中より出土した貿易陶磁器(Po81・82)や瓦質鍋、三足羽釜(Po73)などが確認できるが、前代に比して希薄である。次に確認できるのは近世の遺物であるというのも特徴的であり、2耕作痕の新段階及び29畦畔が近世段階と考えられることと併せて、13世紀以降の当該地の姿が不明瞭である。

$$S=1/8$$

※遺物下部キャラクションの内容は以下のとおり
〔例〕 18 流路 P09
（遺構名）（掲載番号）

凡例

第106図 下坂本清合遺跡2区 遺構内出土土師器器坏・皿 時期別対応図